

創業期三井物産船舶の船員について

—創業期から船舶部設置時まで—

木 山 実

要 旨

三井物産は創業期から自社船として船舶を運航したり、あるいは政府（工部省）や山口県の覇城会社から委託されて船舶を運航したが、本稿ではそれら船舶の高級船員（船長・運転手・機関長など）としてどのような人々がいたのかを検討した。明治前期においては高級船員を養成する商船学校は、三菱商船学校（のちの東京商船学校）や大阪、函館の商船学校しなく、日本人の高級船員の養成が遅々として進まない中、三井物産は高級船員として外国人に依存する一方、本免状より取得が容易とされる仮免状取得者を精力的に雇い入れていたことが明らかになる。また同社では日清戦争を機に船舶を管理する部署が整備されていったことが示された。

キーワード：高級船員（Officers）、商船学校（Merchant Marine School）、免状制度（License System）、たたき上げの人材（Self-made Personnel）、船舶課（Marine Section）

I はじめに

1876（明治9）年に創業した三井物産は、その前身としての先取会社時代に従事した陸軍への絨や武器類の納入業務を継承するとともに、工部省管下の三池炭鉱石炭の販売業務や地租改正と関連して大蔵省から米穀買付けや貢米荷為替業務を任されるなど、次々と御用商売の商権を獲得していった（三井文庫 1980、250-267頁）。

政府は三池炭輸出拡大のために、1878（明治11）年2月に工部省所属の帆

船・千早丸を三井物産に貸与した。さらに大蔵省から船舶購入資金として12万5000円が10ヶ年賦、年利6分という条件で貸与され、三井物産はこの資金でロンドンの代理店を通じて汽船・秀吉丸を購入した。この秀吉丸は78年6月に横浜に到着した。また石川島平野造船所に建造を依頼していた帆船・清正丸は79年に竣工となった——ただし清正丸は81年に売却された。さらに1880年には、大蔵省からの船舶購入資金の残金で再びイギリスから汽船・頼朝丸を購入した。同年末には最初に工部省から貸与されていた帆船・千早丸が釜石鉱山の所属となったため貸下停止となり、翌81年に工部省鉱山局に返却された（日本経営史研究所 1985a、41-43頁；三井船舶 1958、38-39頁、828頁；三井文庫 1980、283頁）。

三井物産は秀吉丸、頼朝丸などの社船を駆使するとともに社外船も利用する形で石炭や米などの物品を輸送したが、輸送量が増加傾向にあったため、1882年には帆船・熊阪丸¹⁾を購入したが、それを84年には帆船製造と物品海上輸送を行う山口県の覇城会社に売却し、引き続き受託船として運航した。先に工部省に返却した帆船・千早丸および帆船・開成丸も覇城会社の所有となり、三井物産は覇城会社から熊阪丸、千早丸、開成丸の3隻の帆船の運航を任された（日本経営史研究所 1985a、44頁；粕谷 2002、159頁）。83年にはさらに汽船・牛若丸を購入したがすぐに共同運輸会社に売却、87年には汽船・通済丸、函館丸を購入し、さらに覇城会社から運航を任されていた帆船・千早丸を買い取った。88年にはかつて覇城会社に売却した帆船・熊阪丸を買い戻し、89年には汽船・筑紫丸を、1890年にはさらに覇城会社から帆船・開成丸を購入している（三井船舶 1958、39頁、829-831頁；粕谷 2002、159頁）。その後も船舶を順次購入し、あるいは老朽船を整理し、1903（明治36）年に船舶部が置かれた時には、船舶7隻（19,635総トン、27,770重量トン）を所有していた（大阪商船三井船舶 1969、5-7頁）。

このような三井物産による創業期からの船舶の保有や受託運航については、

1) 「熊阪丸」は「熊坂丸」と表記される場合もあるが、本稿では引用史料を除いて「熊阪丸」という表記で統一する。

商事会社たる三井物産による船舶の保有・運行を補助業務と捉え、この種の補助業務が三井物産の総合商社化の原因になったのかをめぐって中川敬一郎氏と森川英正氏によって論争が展開されたことがあった（木山 2009、2-5頁）。この中川＝森川論争は、今や古典的論争といえようが、比較的近年では、粕谷誠氏が秀吉丸、頼朝丸という三井物産の社船があげた利益や積立金が、1880年代に同社が商取引において発生させていた巨額の不良債権である滞貸金の処理に充てられていたことを明らかにしている（粕谷 2002、94-99頁）。これらの研究をはじめとして、三井物産による船舶保有は経営史の分野において従来かなり注目されてきたとあってよいが、三井物産が貸与であれ所有であれ、船舶を自ら運航し始めた時期、高級船員（船長・機関手・運転手など）の養成機関としては1875（明治8）年11月に三菱商船学校が設けられ、続いて79年に函館と大阪にも商船学校が設けられ、それらの学校が日本人の高級船員をわずかに輩出し始めていたにすぎなかった。これに加えて貨物保険を外国の保険会社で付保した場合、それら保険会社が海外航路にまだまだ技術的に未熟とみなされた日本人船長を認めなかったため、外国人船長を雇用せざるをえないという事情もあった。当時の日本を代表する海運企業であった三菱でも当初、高級船員は外国人に依存していた（太田 2015）。そのような状況のなか、三井物産社長の益田孝は日本人船長を採用する方針をとったとされている（三井船舶 1958、45頁）が、三井物産が実際、各船舶にどのような高級船員を充当していたのかについては、三井物産の船舶部が独立してできた海運企業たる三井船舶や、さらにその後身の大阪商船三井の社史類が比較的多くの高級船員の名をあげているが、それらがどのような経歴をもった船員なのかについては言及はない（三井船舶株式会社 1958：日本経営史研究所 1985a）。

本稿では、それら社史類も参考にしつつ、主に三井物産の業務日誌である「日記」²⁾（以下では物産「日記」と記す）の記述を中心に、その他の断片的

2) 三井物産「日記」は公益財団法人三井文庫所蔵史料であり、請求記号は「物産1」から「物産31」までである。これは1876（明治9）年の三井物産の開業から1902（明治

な史料類を突き合わせながら三井物産船舶の船員について考察を進めていくことにする。

II 明治前半期の高級船員

(1) 帆船・千早丸

上述の通り三井物産が船舶を運航したのは、1878（明治11）年2月に政府（工部省）から貸与された帆船・千早丸が最初である。社史によると、この千早丸の船長は時期については明記されていないが、河岡彦三という人物であったという（三井船舶 1958、45頁）。物産「日記」の1878（明治11）年2月1日の条に「河岡彦三ニ面会ス」、さらに同年2月20日の条に「^(河)川岡彦三郎第壱等運転手免状試験給済ニ付下渡相成候事」とある。千早丸が工部省から貸与されたのに応じて、三井物産が河岡彦三を急遽雇い入れたということになるだろう。

この河岡とはどのような人物なのであろうか。翌79年12月2日の『朝野新聞』にこの河岡を紹介する記事がある。それによると、河岡彦三はこの記事掲載時の年齢が31歳というから、彼が千早丸に乗り込んだ前年には30歳ぐらいであったということになる。記事によると、彼は山口県平民で1871（明治4）年3月に長崎でイギリス帆船に乗り込み、以後78年1月まで地球を4周し、その間、英国スコットランドで航海学を学び、試験を受けて「第二等運転手の免状を得て帰朝し、その翌月駅通局にて一等運転手の免状を受けその月より本年八月まで或る会社の船長に雇われ長崎上海間の間を廻航せしことその数を知らず（国際人事典 1991、152頁）」とのことである。三井物産は英国で航海学を学んだという、当時としては極めて希有な経験を有する日本人を船長に充てたということになる³⁾。当時の船舶関係の免状保持者を列挙

35) 年までの日々の商取引や人事案件などが記されているもので「第1号」「第2号」というように号が付されている。本稿では以下の行論に際し日付を明記することとして、何号での記載なのかの表記は省略した。

3) 日本経営史研究所 1985、51頁によると、千早丸の船長は当初 Ramsey というオランダ人であったという。Ramsey の後に船長になったのが河岡彦三で、さらに山本又輔、

した「海員録」で最も古い1881（明治14）年版によると、この河岡は「第一則船長」の免状を保有している（山田 1881、1頁）。上の記述と照らし合わせると、河岡は海外で二等運転手の免状を取得した後帰国し、78（明治11）年2月に国内で受験して一等運転手を取得し、さらにその後第一則船長の免状を取得したということになる。

三井物産がこの河岡彦三を知るに至った経緯については史料を欠くが、上述の通り河岡が山口県出身であることを鑑みれば、創業期の三井物産を背後から支えた政治家井上馨をはじめ副社長の木村正幹などの長州閥が一定の影響力を持ち、また三井物産が三池炭の一手販売を任せられ、さらに帆船・千早丸を貸与した政府・工部省側の主任（三池鉱山事務主任）は小林秀知という、これも長州系の人物であったから、これら長州閥の人的ネットワークの中で洋行帰りの河岡が船長の候補として浮上したのではないかと想像される。

『朝野新聞』の記事によれば、三井物産はこの河岡彦三に内航のみならず、上海行きの外航もさせたという。記事にある「或る会社」とは明らかに三井物産を指すが、彼が船長であったのは79年8月までであったと示されているから、河岡が千早丸船長を務めたのは1年半程度ということになる。この時期の三井物産は利益が出た場合、利益の1割を賞与的に「分賦金」として年末に社員に分配することになっていた。誰にいくらの分賦金が支給されたのかが途中退職者、死亡者も含めて細かに記録されていたが、78年末、79年末いずれの記録にも河岡彦三の名がない⁴⁾ところから、河岡のような船員はふつうの職員とは別の給与体系であったのだろう。

そして物産「日記」によると、河岡彦三の後任について以下のような記述がある。

〈1879（明治12）年9月16日の条〉

千早丸船長ニ山本 月給百円一等士官清水 月給八拾円宛ニ而雇

Murray と続き、1892（明治25）年1月には藤木重治が船長になった旨記されているが、本文中で述べたように、物産「日記」では Ramsey や山本又輔らが千早丸の船長であったことは確認できない。

4) 史料紹介 2008、226-234頁。

入候事

〈同年9月20日の条〉

千早丸船長ニ山本甚蔵月給并賄料として月給百円、同壱等運転手清水和助ハ八拾円ヲ以雇入明日同船ニ出出張申付候事

これらから、79年9月になって千早丸の船長に山本甚造を月給100円、一等運転手として清水和助を月給80円で雇い入れたことがわかる。三井物産創業期の上層部の月給は、社長の益田孝が200円、副社長木村正幹は100円、幹部社員では羽太紀克が52円、馬越恭平が37円、古谷龍三と坪内安久が32円である⁵⁾から、山本甚造の100円、清水和助の80円という月給額はかなり高額だといえる。ただしこれら山本と清水に対しても上述の河岡彦三と同様に賞与的な「分賦金」が支払われた形跡はない。当時の船舶関係の免状保持者を列挙した上述の「海員録」の81（明治14）年版によると、山本甚造、清水和助はともに東京府平民であり、81年3月時点で山本は「第三則船長」、清水は「第一則一等運転手」の免状を有していた（山田 1881、2頁、12頁）。

上述の河岡彦三および清水の免状には「第一則」、また山本の免状には「第三則」という語が付いているが、これらを理解するために当時の船員に関わる免状（免許）制度について少し見ておくことにしよう。

これら第一則とか第三則というのは、1876（明治9）年に政府によって制定された「西洋形商船々長運転手機関手試験規則」における船員免状制度に属するものであり、河岡と清水の「第一則」とは本免状のうち第一則、第二則と分かれている内の1つであり、山本甚造の第三則船長の「第三則」とは仮免状のことである⁶⁾。

その試験制度において本免状では、船長に至るプロセスとして二等運転手→一等運転手→船長、機関手では二等機関手→一等機関手という上昇することが想定されていた。受験資格としては、二等運転手は4年以上の船舶勤務

5) 創業時の益田孝と木村正幹の月給額は三井文庫1980、245頁、羽太紀克以下の月給額は史料紹介 2007、330頁、による。

6) 山田 1881、冒頭の「凡例」に「一則二則ハ本免状ニシテ三則ハ仮免状ナリ」とある。

経験もしくは2年以上商船学校に在学・合格したうえで3年以上の勤務経験が求められた。また一等運転手と船長については、それぞれ1年以上その下位免状の職務で勤務していることが求められた。機関手についても船上での勤務経験が求められた。そして本免状では、船長と一等機関手については第二則という形で例外が認められ、4年以上の船長・一等機関手の職務経験がある者は、正規の試験を受けなくとも本免状を付与できることとされた。このように第一則であれ第二則であれ、本免状を取得する場合には船上勤務経験を経たうえで学科試験に合格する必要があったが、日本人で船長よりも下位の職にある船員などにとっては試験をパスすることは難しく、そこでそのようなたき上げの船員たちを救済すべく設定されたのが仮免状（第三則）である。

仮免状については、船長・一等運転手・二等運転手についてはそれぞれの試験から1問だけ解答することと、日本沿岸の地勢に通暁していることのみが求められ、一等機関手についても面体の求積法、関平方の問題、二等機関手は外輪・螺旋機関各種の原理・機関内外諸部転動の原理の理解に関する問題にのみ解答すればよかったから、仮免状の取得は本免状の取得よりも容易であった（太田 2015、175頁）。

すでに述べたように、明治前期においては船員教育の学校は東京の三菱商船学校が1875（明治8）年11月に設けられ、続いて79年に大阪と函館に商船学校が設けられていたにすぎず、高級船員はもっぱら外国人に依存する状態であった（三井船舶 1958、45頁）。そのような状況下で外国人船員への依存から脱するには、わずかに設けられ始めていた商船学校生徒の育成を待つか、上述の河岡彦三のような外国で航海学を学んだ人材を雇い入れるか、たき上げの船員たちに本免状を取得させるか、それが無理なら仮免状を取得させるかの方法が用意された。

千早丸の先の船長、河岡彦三は外国船に長年乗り込んで外国で免状を取得し、帰国後に日本でも第一則船長を取得したが、山本甚造や清水和助はどのような経歴の持ち主なのかについては史料を欠く。彼らが千早丸に乗船を開

始した時点で、国内の商船学校で卒業生を輩出していたのは三菱商船学校のみであるが、その卒業生に彼らの名は見られない（商船学校 1912、185-186頁）から、彼らはたたき上げの船員だったとみられる。清水和助は81年時点で第一則の一等運転手を取得していたから、河岡彦三のようにかなりのキャリアを有する船員だったのではないかと思われる。

千早丸の他の船員については、物産「日記」で下のような記述がある。

〈1879（明治12）年9月9日の条〉

千早丸即今乗組水夫水野角次郎

右は技術一等士官免状申請可相成ものニ付追而長崎県ニ而検査可相願事
上述の「海員録」1881（明治14）年版で確認すると、この水野角次郎は静岡県平民で、81年時点で水野が所持しているのは「第三則船長」である（山田1881、21頁）。上でみた79年の「日記」の記述では、水野角次郎が一等士官、すなわち一等運転手⁷⁾の免状を申請する旨書かれているが、これは一等運転手の試験をこれから受けるという意味であろう。水野は81年時点では第三則（仮免状）船長を保有している。この水野も商船学校の卒業生名簿に名前がないから、たたき上げの船乗りであったと推測される。

この後の千早丸については物産「日記」に次のような記載がある。

〈1880（明治13）年7月22日の条〉

河岡彦三不快ニ付千早丸出帆不出来候段届出ル

〈1881（明治14）年5月25日の条〉

過ル廿三日千早丸鉾山局へ返上、河岡彦三ヲ以書面差出ス

〈同年7月23日の条〉

同船（第二同福丸のこと…木山注）長^并千早河岡船長午前来訪
すなわち千早丸の船長は再び河岡彦三に戻っていたようであり、千早丸が1881年に工部省に返却された後も河岡はその船長の職にあったようである。

7) 太田 2015、178頁の注17に「三菱内部では、当初運転手については「士官」という名称が使用されていた。」とあり、ここでもその語法であったと判断した。

(2) 帆船・清正丸と帆船・開成丸

三井物産が1878（明治11）年に東京石川島の平野造船所に発注をかけていた帆船・清正が翌79年に完成した。清正丸の船員については、物産「日記」には次のような記載がある。

〈1879（明治12）年12月31日の条〉

清正丸船長其外へ対□□労金五拾円遣候事

〈1880（明治13）年4月29日の条〉

清正丸十二年中計算済候ニ付船長千葉登良三江為賞純益百分ノ五支給申渡ス

これらから、清正丸の船長は千葉登良三という人物だったことがわかるが、「海員録」（1881年版）によると、この千葉は山口県平民で第三則船長である。上述の山本甚造、水野角次郎と同様に、この千葉登良三も第三則という、本免状より合格しやすい仮免状の保持者ということになる。上の記述では千葉には純益の100分の5が支給されたとあるが、千早丸の河岡彦三、山本甚造、清水和助らに一般職員らに支給された賞与的な「分賦金」が支払われた形跡がないのと同様に、千葉登良三にもこの「分賦金」支給は確認できない⁸⁾。よって千葉に支給されたという「純益百分ノ五」というのは清正丸があげた利益の5%という意味であろう。79（明治12）年の清正丸の利益は2617円であるから（粕谷 2002、170頁）、千葉にはその5%にあたる130円余が賞与として支給されたとみられる。千葉登良三が次に物産「日記」に現れるのは以下のごとく1882（明治15）年7月である。

〈1882（明治15）年7月10日の条〉

元清正丸事豊国丸一昨日品川入港薮田氏頼米近江米三百俵大坂浜崎伊七殿より肥後米百五十俵送り荷有之候事船長千葉登良造来店ス

この時点では清正丸はすでに売却されていたはずで、それゆえ「元清正丸事豊国丸」という表現がとられている。すなわち売却された清正丸は豊国丸と

8) 史料紹介 2008、226-234頁。

改称されていたが、千葉登良^(造)三はそのまま同船の船長の職にあり続けたということであろう。だが千葉は次の記述のように、まもなくして三井物産に戻ってくる。

〈1883（明治16）年1月31日の条〉

開成丸社長杉本解雇ス、千葉登良^(船カ)造ニ申付ル

山口県の覇城会社から託されていた帆船・開成丸の船長を1883年1月末に申し付けたというのであるが、その開成丸船長の前任者は杉本という人物であったという。そこで「日記」を遡って開成丸船長にあたってみると、次のような記述がある。

〈1882（明治15）年4月20日の条〉

開成丸為船長杉本勘次郎当二十九才之者雇入月給乗込中月五拾円宛支給
相決覇城社へも及通知候事

1882年に覇城会社から運航を任された時点での開成丸船長は杉本勘次郎という人物であったということになるが、「海員録」1882（明治15）年版でみると、この人物は第三則船長の免状保有者で、東京府平民である（松井 1882、27頁⁹⁾。その時点で29歳であった杉本勘次郎の月給額は50円であったという。それから9ヶ月後に杉本勘次郎は解雇されて、清正丸船長であった千葉登良三が開成丸船長に転じたということになる。

翌年3月には、この開成丸と千葉登良三に関する記載が以下のように登場する。

〈1883（明治16）年3月8日の条〉

一、開成丸改名ハ長門丸と致呉候様覇城会社より申来候間其掛リ江申間置候事…

一、清正丸船長千葉登良造同船石川島ニ而打立明治十二年二月ヨリ従事し
四月より乗船昨十五年六月売払迄尽力実ニ船長之職ヲ尽候間為賞与金三百円支給申渡ス

9) 「海員録」の1882年版では杉本勘二郎という表記だが、前年の1881年版では、「勘次郎」表記で、三則一等運転手であるから1年の間に昇級したのであろう。

一、同船長解雇十六年十一月トシ長門丸船長ヲ一月ヨリ雇入之書面ヲ渡ス
1879（明治12）年から82年6月の売却まで清正丸船長を務めた千葉には、賞
与金として300円が支給されたというから、千葉は三井物産でもその功績が
高く評価されていたということになろう。そして千葉が船長となった開成丸
については、船主の覇城会社から長門丸に改称したいという申し出があり、
長門丸と改称した船の船長（千葉登良三）を3月8日の時点で同年の11月で
解雇することがすでに決められていたという。これはやや奇異な印象を抱か
せるが、次の記載から、千葉登良三はその時点ですでに病に冒されていたと
思われる。

〈1883（明治16）年11月2日の条〉

一、千葉登良造病氣為保養長門丸船長当分解雇候事

一、田坂初太郎開成丸（長門丸事）船長トして雇入候事

病氣であった千葉登良三に保養させるべく解雇を申し付け、開成丸改め長門丸の船長として田坂初太郎を新たに雇い入れたという。田坂初太郎の経歴については、彼の郷里である愛媛県弓削町が発行した『弓削町誌』に詳しく書かれている。それによると、彼は1851（嘉永4）年生まれで、1871（明治4）年、彼が19歳の時に神戸に出て、郵便蒸気船会社の船舶千里丸に水夫見習として乗り込んだ。最初の月給額は2円50銭であったという。千里丸乗船後6ヶ月で水夫に昇進し、姉妹船の萬里丸に転じた。76（明治9）年に水夫長となっていた彼は東京品川に居を構え、翌77年に品川に水上警察が創設された際、警視庁の雇員となって48名の水夫監督として仁風丸に乗り込んだ。そこでの働きぶりがみとめられ、その警察署長からすすめられて小型船長の免状試験を受付けて合格し、船長に進んだ。田坂は千足利右衛門に招かれ千足所有の帆船全国丸、日本丸などの船長として乗船した。さらに81（明治14）年には「甲種船長」の免状を取得したという——「海員録」81（明治14）年版によれば、田坂がその時点で保有しているのは第三則船長の免状である（山田 1881、15頁）——。その後、三井物産から工部省に返却されていた帆船・千早丸、さらに同福社の帆船・同福丸の船長になった後、84（明治17）

年に三井物産に入って¹⁰⁾その帆船・開成丸の船長となり、日本近海各地はもちろん、遠くはケープタウンまで航行することもあったという。彼の三井物産での勤務は5年ほどであり、さらに日本石炭会社の汽船・豊国丸の船長に転じるなど、その後も所属を転々とした¹¹⁾(弓削町役場 1986、1352-1353頁)。この田坂初太郎も商船学校の卒業生ではない。上でみた山本甚造、水野角次郎、千葉登良三らと同じく、たたき上げで第三則船長の免状を取得した人物である。

(3) 商船学校出身者の採用

三井物産が初めて運航した汽船である秀吉丸については、物産「日記」に次のような記載がある。

〈1878（明治11）年7月8日の条〉

松井□儀秀吉丸為乗組雇入候尤乗組中月給金三拾円宛支給候右指令
松井某を秀吉丸の乗組員として新たに雇い入れ、月給30円を支給することになったという。この月給額30円というのは、先に述べた当時の幹部社員古谷龍三と坪内安久の月給額32円に迫る額である。秀吉丸の高級船員については、社史に次のような記述がある（日本経営史研究所 1985a、51頁）。

船長：Brown（イギリス）、Cottes（イギリス）、Gall, Murray、Will、
浅井精一郎（明治25年1月）

機関長：Pritchett

ここでは秀吉丸の最初の船長は Brown というイギリス人とされているので、「日記」に出てくる松井某は船長ではない船員なのだろう¹²⁾。秀吉丸の日本

10) 弓削町役場 1986、1353頁では、田坂初太郎の三井物産入社は1884（明治17）年とされているが、本文中で示したように物産「日記」では彼の物産入りは83年11月となっており、若干の差異が見られる。

11) 田坂初太郎はその後、船主に転じて得た資金で種々の事業を展開し、光明合資会社にも資本参加した。この会社が1897（明治30）年に日本ペイント製造株式会社に改組された後、99（明治32）年にはその社長に就任した。彼は郷里に弓削商船学校も設立している（日本ペイント 1982、47-70頁）。

12) 「海員録」（1881年版）で本免状あるいは仮免状の保有者として松井姓の者は見当たらず。

人船員については、松井某以降は、特に「日記」に記述はみられず、長らく外国人船長が続いたが、これは秀吉丸が三井物産が所有した初めての汽船であったからであろう。そして1892（明治25）年1月になってようやく日本人の浅井精一郎が船長に就いたという。「海員録」1881（明治14）年版に浅井精一郎の名はないが、82（明治15）年版には静岡県士族で第一則二等運転手の免状保持者として登場する（松井 1882、9頁）。浅井は三菱商船学校航海科の1期生であり、同校を1881（明治14）年12月13日に卒業している¹³⁾から（商船学校 1912、187頁）、卒業後にこの免状を取得したということになる。

三菱商船学校は1877（明治10）年に高砂丸、新潟丸という2隻の汽船の修理を兼ねてこれらを練習船としてイギリスに派遣したが、すぐれた生徒を選抜してこれに乗船させることにした。浅井はその実習派遣生に選ばれている。浅井が乗船した高砂丸は77年4月11日に横浜を出港し、乗組員は10月11日にロンドンに到着したが、その後紆余曲折を経て、浅井はともに派遣された三田村鐘三郎とともにイギリスの船舶に乗り込んでインドやメキシコ方面への航海実習にも参加するなど経験を積んだ。そして浅井らはロンドンで現地の船舶運転手の免状を得たのち、1881（明治14）年9月15日に帰国する（東京商船大学百年史編集委員会 1976、100-117頁）。そして本節の冒頭で述べたように、同年末に第一則二等運転手の免状を取得したのであろう。

三菱商船学校を卒業した浅井は運転手として、まず三菱社船高千穂丸の船員となった（太田 2015、182頁の第5表）が、まもなくして三菱を退社したようであり、1883（明治16）年には三井物産が覇城会社から託された帆船・熊阪丸の船員になっていた。同年、この熊阪丸に大阪商船学校の生徒であった榑崎猪太郎が実習生として乗船を許されているが、榑崎は同年9月に熊阪丸に乗り込んだ時のことを次のように記している（米窪 1939、29頁）。

英人エラス当時船長にして、同国人アンダーソン一等運転手、浅井精一

ないし、三菱商船学校の卒業生にも松井姓の者はいない。

13) 現在のような卒業式の日に一斉に卒業するのではなく、卒業日は人によってばらつきがある。

郎氏二等運転手、藤木重治氏水夫長の職に居り、水夫は総て日本人、賄方には支那人を用ゆ

榑崎は翌84（明治17）年7月以降のことを、さらに次のように記す（米窪1939、30頁）。

此月浅井氏下船す。十二月船長交代す。後任船長ゼーウィル其職を執る。…中略…同十九年七月実地修業満期につき一時下船して大阪本校に帰る。全科を卒業し九月甲種二等運転手に及第し同免状を受く。同年再び熊阪丸に帰り水夫長の職を執る。此時藤木氏は二等運転手に昇進せり。

榑崎猪太郎が実習生として熊阪丸に乗り込んだ83（明治16）年9月には、その船長はエラスというイギリス人であり、その下には浅井のような日本人運転手に加えて藤木重治という水夫長がいたというのであるが、翌84年7月には浅井精一郎が熊阪丸を下船、さらに同年末に船長がゼーウィルという人物に代わったという¹⁴⁾。榑崎は86（明治19）年7月に3年弱にも及んだ熊阪丸での実習を終えて大阪商船学校を卒業した後、甲種¹⁵⁾二等運転手の免状を無事取得し、再び熊阪丸に戻って、その水夫長を任された。それまで熊阪丸の水夫長であった藤木重治は玉突き式に二等運転手に昇格している。

1884（明治17）年に熊阪丸を離れた浅井精一郎の足取りは、史料上その後少し途絶えてしまうが、87（明治20）年9月には汽船・函館丸の船長に就任している（三井船舶 1958、831頁）。そして88（明治21）年に入ると、「日記」で次のように出てくる。

〈1888（明治21）年1月23日の条〉

函館丸船長浅井精一郎ヲ通済丸船長トシ、同船長豊島鎌吉解雇シ^(前)□^(虫損)芝直
助ヲ函館丸船長トシ、いつれも月給九拾円トス

浅井精一郎の前の通済丸船長は豊島鎌吉であったということだが、「海員録」

14) 日本経営史研究所 1985、51頁に1884（明治17）年の筑紫丸船長として Will の名があるから、「ゼーウィル」とはこの Will を指すのだろう。

15) 1882（明治15）年に船舶関係の試験制度に改正があった。仮免状に代わって乙種免状を設けて試験内容をやや高度にし、本免状を甲種免状と改称していた（太田 2015、177頁）。

1881年版によると、豊島は81（明治14）年時点で第三則船長、東京府平民である¹⁶⁾（山田 1881、23頁）。この豊島鎌吉は商船学校の卒業生ではないようだが、前年の1887（明治20）年7月末に通済丸船長として雇われた際の月給額は90円であったと物産「日記」に記されている¹⁷⁾。豊島は通済丸船長就任からわずか半年後に浅井精一郎にその船長の職をとって代わられたが、上の「日記」記載によると、浅井が函館丸船長から通済丸船長に転じた時の月給額も90円である。また浅井が抜けた函館丸の船長は、浅井の後任として前芝直助という人物が就いたようだが、「海員録」1882（明治15）年版によると、前芝は和歌山県平民で第一則船長である。彼も三菱商船学校の卒業生に名がないから、この免状を取得するまでにすでに船員としてのキャリアを積んでいたような人物だったのであろう。上の「日記」記載によると、函館丸船長に就任した前芝直助の月給額も浅井精一郎と同額の90円である。このように88年1月末に汽船・通済丸、函館丸という2隻の船長の異動がなされたのも束の間、物産「日記」の次の記載のように、前芝にはまた異動の命が下った。

〈1888（明治21）年4月13日の条〉

熊坂丸船長外国人ヲ免シ前芝直助ヲ代り申候

この時点まで帆船・熊坂丸の船長は Will だったとみられるが、それに代わって前芝直助が同船船長に転じたということになる。また浅井精一郎は上述の通り、1892（明治25）年1月に汽船・秀吉丸の船長に転じている。

さて大阪商船学校出身の榎崎猪太郎は、1886（明治19）年に帆船・熊坂丸に戻ってその水夫長に任命されていたが、翌87年3月には二等運転手に昇格し、玉突き式に藤木重治が一等運転手に昇格した¹⁸⁾。榎崎はさらに翌88年5

16) ただし「海員録」1881年版では豊島鎌吉ではなく「謙吉」の表記である。物産「日記」が誤記なのかとも思われたが、「帝国海員録」1897（明治30）年版では「豊嶋鎌吉」の表記で東京平民、甲種船長として登場するから（横井 1897、4頁）、ここでは物産「日記」の表記通り豊島鎌吉と表記した。

17) 物産「日記」1887（明治20）年7月30日の条。ちなみに三井船舶 1958、831頁では、87年9月の浅井精一郎の汽船・函館丸船長就任をもって日本人の汽船船長の最初としているが、それに先立つ7月に豊島鎌吉が汽船・通済丸船長に任命されていたということになる。

月に汽船・秀吉丸の二等運転手に、89年10月には汽船・筑紫丸の二等運転手に転勤となった後、90年には三井物産を辞して富山県の南島間作所有汽船・奈古浦丸に転じてその船長になった。だが93（明治26）年7月には、再び三井物産に戻って汽船・筑紫丸の一等運転手になっている（米窪 1939、38-43頁）。榑崎猪太郎はこれ以後の自身の職階と給与の推移を細かに記載しているので、それを表1とし掲げておく。彼がかなりめまぐるしく異動しているのがわかる。

なお榑崎猪太郎が三井物産で初めて乗り込んだ帆船・熊阪丸は、山口県の

表1 榑崎猪太郎の職位・給与の推移

年(明治)月	職位	給与
26年 7月	筑紫丸一等運転士	月俸60円
27年 7月	〃 船長	月俸125円+交際費15円
28年 1月	手代5等	
〃 2月	頼朝丸船長	
〃 4月	阿蘇山丸船長	月俸150円
29年 4月	手代4等	月俸160円
〃 12月	勝立丸船長	
〃 〃	臨時頼朝丸船長	
30年 3月	勝立丸船長に復帰	
32年 6月	剣山丸船長	月俸170円
33年 4月		月俸200円
34年 5月		月俸220円
36年 12月		月俸230円
38年 7月	社名下船	
〃 9月	予備船長	
42年 11月	三井物産退社	

(史料) 米窪 1939、43-44頁により作成。

18) この藤木重治はこの後、1892（明治25）年7月に帆船・千早丸の船長になる人物である（日本経営史研究所 1985、51頁）。

覇城会社に売却されたが1888（明治21）年に買い戻されている。社史ではこの買い戻しの時点で鳳凰丸と改称されていたかのように記されている（三井船舶 1958、39頁、831頁）が、物産「日記」によると、熊阪丸が鳳凰丸と改称されたのは日清戦争さなかの1894（明治27）年11月8日である¹⁹⁾。

Ⅲ 日清戦争と三井物産船舶の船員

三井物産にとって秀吉丸に続いて2隻目の汽船となった頼朝丸は、1880（明治13）年にイギリスから購入されたものだが、同船は同年6月26日に無事、横浜に到着した。物産「日記」には同年7月3日に横浜で頼朝丸の披露を兼ねた祝賀会が催されたことが記されている。政官界からは参議の井上馨、大隈重信、川村純義をはじめ海軍卿榎本武揚や工部卿山尾庸三、東京府知事松田道之、神奈川県知事野村靖、財界からは渋沢栄一や岩崎弥太郎をはじめ三井家同族など錚々たる面々が招かれての盛大なものであった——ただし大隈重信や岩崎弥太郎らは欠席している²⁰⁾。

この頼朝丸の高級船員の変遷について、社史では次のように記されている（日本経営史研究所 1985a、51頁）。

船長：Cottes, Gall, Murray, 浅井精一郎

機関長：Steward（イギリス）、Pritchett, 小島清

だが物産「日記」では、これら高級船員に関しては、1889（明治22）年10月末に「船長ゴール」の病状が悪化し、上海で死去したと来電があった旨の記述²¹⁾がある程度である。このゴールとは、上でみた社史の記載の中の2人

19) 三井物産重役会議の「議事録」（物産102）では、帆船・熊阪丸が鳳凰丸と改称した理由が書かれている。1894（明治27）年6月に熊阪丸が上海に航行した際、日清戦争が勃発し、日本の国旗を掲揚したままでは帰国できない状況に陥り、同船はアメリカ国旗を掲げて何とか日本に帰航し品川沖に停泊されたが、「従前之通り我国旗ニ変更ノ手續相尽シ候ト共ニ船主名共当分ノ内総テ新規ノ者ト致候方帰港ノ方便トシテ一時名義ヲ貸シ呉レ候、外商ニ対シ候フモ可然哉ト相考候ニ付」とある。戦時下の混乱時に日本への帰国を果たすために一時的な措置として船名を変えていたというのであろう。

20) 物産「日記」1880（明治13）年7月3日の条。

21) 物産「日記」1889（明治22）年10月25日と同28日の条。

目の船長「Gall」を指すのだろう。よって頼朝丸船長の職はゴール（Gall）の死後、Murray に引き継がれたと思われる。その後、物産「日記」に頼朝丸船長の交代に関する記述が出てくるのは以下のように5年後のことである。

〈1894（明治27）年7月4日の条〉

辞令発布 本日社船々長ノ^(ママ)交迭ヲ行ヒ左ノ辞令相發ス

秀吉丸船長 浅井精一郎

頼朝丸船長ヲ命ス

筑紫丸一等運転手 榎崎猪太郎

筑紫丸船長ヲ命ス

頼朝丸一等運転手 藤木重治

秀吉丸船長ヲ命ス

前項の汽船・秀吉丸のところでもみたように、浅井精一郎は1892（明治25）年1月に秀吉丸船長に就任していたが、94（明治27）年7月4日にこの頼朝丸の船長に転じたということになる。そしてそれまで頼朝丸の一等運転手であった藤木重治が浅井の後任として秀吉丸船長に昇格している。また上の記述からは、それまで筑紫丸一等運転手であった榎崎猪太郎が浅井精一郎や藤木重治の異動と同日に筑紫丸船長に昇格していることが察知される。筑紫丸の榎崎の前任の船長は Will であったようだが（日本経営史研究所 1985a、51頁）、同時に頼朝丸と筑紫丸という2隻の汽船の外国人船長を更迭したということになる。この更迭の背景には明らかに日清戦争開戦への対応という側面があった。

1894（明治27）年に朝鮮で甲午農民戦争（東学党の乱）が起こり、これに対して日本と清国が派兵し、それが日清開戦につながっていくが、日本の伊藤博文内閣は同年6月2日に朝鮮に混成旅団出兵を決定し、5日に派兵している。またその翌日には参謀本部に大本営が置かれおり、日清開戦が間近に迫る状況であった（伊藤 2015、369頁、374頁）。そしてこの時期の物産「日記」には次のような記載がある。

〈1894（明治27）年6月8日の条〉

秀吉丸・筑紫丸共引続キ鎮守府ノ御用船トナリ朝鮮ニ航行ノ事トナル
〈同年6月13日の条〉

長崎出張店ヨリ又々鎮守府へ頼朝丸ヲ一日六百五十円ノ割合ヲ以テ、貸
約定取結ヒタル旨来电アリタリ、右許可ス

三井物産の秀吉丸、筑紫丸、頼朝丸は次々と海軍に徴用されていたことがわかる。7月4日の頼朝丸、筑紫丸の外国人船長更迭も両船が海軍に徴用され、日清開戦が迫るなか欧米諸国が局外中立を宣言することを見越しての対応だったとみてよいだろう。この時期、三井物産は他に汽船・有明丸を所有していたが、その船長はハルストローム（Hollstrom）という外国人である。この有明丸が軍の御用船になったという記載やハルストロームが更迭されたという記載は物産「日記」ではみられない。当時の『読売新聞』記事によると、有明丸は日清開戦が差し迫っていた7月22日に長崎を発って香港に航行し、同港に停泊中に日清開戦の宣戦布告がなされた。清国軍艦2隻が香港の港内に停泊したために有明丸は日本に向けて出港することができず、足止めを食らうことになったという。記事によるとこの時、有明丸には「船長英人フオルストーン、一等運転手英人ギレスビー、二等運転手同ライス、三等運転手商船学校生徒堀保介の四氏と機関に英国人デビー、マキー氏等」の高級船員が乗り込んでいた。船長は清国軍艦からの攻撃を恐れ、出港の意思がないことを示すため8月24日には水夫、その他の普通船員を解雇したが、現地滞在の書生や人夫をかき集め、彼らをにわか仕込みの水夫、火夫に仕立てて出港の機会をうかがった。そして9月7日の深夜、有明丸は夜陰に紛れて出港し、9月17日に無事長崎に到着した（読売新聞 1894、5頁）。有明丸はさらに9月28日に横浜に入港したが、翌日には益田孝、木村正幹、上田安三郎ら幹部を交えて帝国ホテルで船長らを慰労する午餐会が催されたことが物産「日記」に記されている²²⁾。香港からの帰国後も有明丸船長が交代したという記載は

22) 物産「日記」1894（明治27）年9月29日の条。

ない。

この少し後の10月18日の三井物産重役会議では、東京本店に臨時船舶掛を設けることが決議されている。その議事録は下のようなものであった。

本店ニ臨時船舶掛ヲ設クルノ件

本社所有ノ船舶ハ従来其使用地便宜ノ支店ニ於テ支配シ来リタルニ去六月以来何レモ政府ノ御用船トナリタルニ付都テ本店ニ掛リヲ置キ直接ニ取扱ヒ外国課長ヲシテ之ヲ支配セシメ度事

右議決ス

この議事録からは、三井物産がこれまで運航してきた船舶は、各船が関係した店舗で随時「支配」、すなわち運航の調整・管理をしてきたということが読みとれるが、この戦時下に際して社船が御用船として徴用されていることを鑑みて、今後は本店に臨時船舶掛を置き、全てそこが管轄することにしたというのである。これは後の船舶部設置に向けた大きな一歩とあってよいが、その設置契機は日清戦時体制への対応だったということになろう。そしてこの臨時船舶掛の主任には上海支店支配人の小室三吉がそれと兼務するよう命じられている。東京本店に置かれた臨時船舶掛主任を小室三吉が上海支店支配人のまま兼任できたのは、戦時に際しての臨時船舶掛設置と同時に上海支店を引き上げて一旦閉鎖し、同支店の業務を一時的に東京に移すことが決議されており、それによって小室三吉は東京に戻って来ることになったからである²³⁾。物産「日記」ではこれ以後、特に「臨時」という文字は付されず、単に「船舶掛」と表記されている。

日本が優勢に戦局を進める中、ハルストロームら外国人船員はその後どうなったであろうか。まだ戦争が終結していない1895（明治28）年2月末の物産「日記」には次のような記載がある。

〈1895（明治28）年2月23日の条〉

手代四等頼朝丸船長 浅井精一郎

23) 三井物産「議事録」（三井文庫所蔵史料）請求記号：物産102。

有明丸船長ヲ命ス …(中略)…
 手代三等有明丸船長 ハルスト・ローム
 船長予備トス
 ジョン・プリチエツト
 尙等機関手予備トス …(中略)…
 手代五等筑紫丸一等機関手 小島 清
 有明丸一等機関手ヲ命ス

この時まで有明丸船長であったハルストロームに代わって頼朝丸船長の浅井精一郎が有明丸船長となり、ハルストロームは予備船長となった。また筑紫丸一等機関手の小島清が有明丸の2代目機関長であったプリチエツト(Pritchett)に代わり、プリチエツトは予備となったというのである。これら両外国人は戦時においても、この時点まで交代されていなかったということになる。その8ヶ月後の物産「日記」には次のように記されている。

〈1895(明治28)年10月18日の条〉

有明丸船長 [ハルストローム] 浅井精一郎及一等機関手 [プリチエツト]
 小島上陸出社ス

2人の外国人船員から日本人の浅井精一郎と小島清に交代したといっても、それは便宜的な措置で、ハルストロームとプリチエツトも乗船していたような書きぶりである。さらに物産「日記」の次のような記載からは、日清戦争終結後でさえ、かつて船長や機関長という役職を更迭された外国人船員は、役職を更迭されただけで実際には戦争終結後も報酬が支払われていた可能性を示唆している。

〈1895(明治28)年7月13日の条〉

元有明丸一等機関手トムクン^(ソ)及元熊坂丸船長ジョンウイ^(ソ)ル解雇手当金支給ノ議決ス

〈同年8月1日の条〉

辞令発布 左の辞令書相発ス

元熊坂丸船長

ジョンウイ^(ソ)ル

明治十七年以来当会社ニ奉仕シ、帆船熊阪丸、汽船秀吉丸及筑紫丸ニ船長ノ職ヲ執リ忠直ニ勤続シタルノ功ヲ賞シ特ニ金壹千円ヲ給与ス

元有明丸一等機関手 アル・エス・トムソン

明治廿一年以来当会社ニ奉仕シ、秀吉丸・筑紫丸・有明丸ニ一等機関手ノ職ヲ執リ忠直ニ勤続シタルノ功ヲ賞シ特ニ金三百五十円ヲ給与ス

〈1896（明治29）年2月20日の条〉

元勝立丸船長 エー、マーレー

解雇ス

元勝立丸船長 エー・マーレー

明治十五年以來当会社ニ奉仕シ千早丸、秀吉丸、頼朝丸、有明丸及勝立丸ニ船長ノ職ヲ^(執カ)□リ忠直ニ勤続シタルノ功ヲ賞シ、特ニ金八百円ヲ給与ス

上の記述からは、外国人船員を解雇した際には、賞与的な退職金が支給されているのがわかるが、それはかなり高額なものであったことが示されている。そして戦争が終わったということで、95（明治28）年の年末には戦時下で軍部に徴用されていた浅井精一郎、榑崎猪太郎らを筆頭とする三井物産船員らは褒賞を受けている²⁴⁾。

IV 船舶部の設置に向けて

日清戦争中に三井物産社船を管轄する臨時船舶掛が設置されたことはすでに述べたが、1896（明治29）年3月にはこの臨時船舶掛を廃止して通信課を設置し、船舶事務はここに移管されている。翌97（明治30）年3月にはその通信課を通信掛と改称し、さらに98（明治31）年6月には船舶掛を船舶課と改称し、大野市太郎をその主任とした。同年10月にはこの船舶掛は口之津支店内に設置され、翌99（明治32）年2月には藤村義朗が新たに主任に就任し

24) 1895（明治28）年12月25日付で浅井精一郎と榑崎猪太郎には勲六等单光旭日章と150円が授与されている。浅井、榑崎以外にも20名以上の三井物産の船員が一斉に褒賞を受けたことが物産「日記」1896（明治29）年2月17日の条に記されている。

た。そして同年10月には船舶課長に同族の三井守之助が就任したが、1902（明治35）年5月には船舶課は廃止され、船舶事務は口之津支店船舶掛に移管された。船舶事務が口之津に移されたというのは、三井物産の船舶にとっての三池炭の重要性を物語っている。そして翌03（明治36）年4月にはいよいよ船舶部が設置される。船舶部は門司に置かれ、初代船舶部長にはかつて船舶掛時代に主任を務めたこともある藤村義朗が就任する（日本経営史研究所 1985b、256-259頁）。

表2は、その船舶部が設置される前年にあたる1902（明治35）年の三井物産の従業員名簿である「使用人録」から船員を抜粋したもののだが、その時点でもまだハルストロームが唯一の外国人として残っている。表2からは、ハルストローム以外は全て日本人となっており、この44名の日本人のうち商船学校²⁵⁾を卒業していることが確認できるのは16名であり、教育機関による船員養成が進展したことがわかるが、商船学校の卒業生ではない者もこの時期まだかなりいたことがわかる。

船員の筆頭には浅井精一郎が記されているが、浅井の月給額はハルストロームより25円安い225円である。表2では浅井の雇入（開始）年月は1894（明治27）年5月となっているが、ここまで見てきたように浅井精一郎や、あるいは榎崎猪太郎、藤木重治らはかなり早くから三井物産船舶に乗り込んでいた。なぜ彼らの雇入れ開始がこれほど遅く書かれているのかは不明である。ただ3人目に記載されている榎崎猪太郎は、前掲の表1によれば、1874（明治27）年7月に筑紫丸船長に就いているから、表2は乗組船はおくとして、現時点の役名（船長や機関長など）に就任した時期を「雇入年月」と表記しているのかもしれない。ともあれ、浅井精一郎と外国人船長としてのハルストロームこそ三井物産の船舶運航を初期の時代から支えた功労者とし

25) 明治前期には三菱商船学校（1882年に農商務省に移管され商船学校と改称。のちの東京商船学校）と大阪商船学校、函館商船学校があったが、三菱商船学校と（東京）商船学校の卒業生は商船学校（1912）で確認できる。大阪と函館の商船学校は東京の商船学校に統合された後は分校となるが、大阪分校は1895（明治28）年、函館分校は1898（明治31）年以降の卒業生が商船学校（1924）などで確認できる。

表2 三井物産船舶の高級船員（明治35年）

姓名	雇入年 月 (明治)	増給年月 (明治)	月給 (円)	乗組船・役名	出身商船学校名・卒業年月日 (明治)
浅井 精一郎	27 5	34 5	225	船舶監督	三菱商船・航海科14年12/13卒
ハルストローム	14	32 6	250	彦山丸船長	
植崎 猪太郎	27 7	34 5	220	剣山丸船長	大阪商船・航海科19年卒
藤木 重治	27 7	34 5	210	勝立丸船長	
田阪 為松	30 11	34 5	190	有明丸船長	
堀 保介	28 2	34 5	170	富士山丸船長	東京商船・航海科27年11/7卒
矢澤 久次郎	30 6	34 5	155	愛宕山丸船長	東京商船・航海科26年12/23卒
清水 潔	33 4	34 5	145	阿蘇山丸船長	
田中 隆	28 6	34 5	190	彦山丸機関長	
蔵田 精祐	29 2	34 5	190	剣山丸機関長	東京商船・機関科23年12/20卒
岡本 嘉三郎	27 8	34 5	180	勝立丸機関長	東京商船・機関科25年10/28卒
山地 善七	28 3	34 5	175	有明丸機関長	東京商船・機関科26年10/6卒
箱石 朝政	28 5	34 5	170	富士山丸機関長	
岸田 松彌	29 8	34 5	155	愛宕山丸機関長	
守谷 榮次	32 8	34 5	155	阿蘇山丸機関長	
村井 啓次郎	29 8	34 5	110	予備一等運転士	東京商船・航海科29年7/27卒
佐分利 鍋太郎	34 5		110	有明丸一等運転士	東京商船・航海科26年6/13卒
山本 均	34 5		110	勝立丸一等運転士	
齊藤 諭吉	30 12	34 5	95	彦山丸一等運転士	
下川 龍爾	31 5	34 5	85	富士山丸一等運転士	東京商船・航海科29年5/23卒
小関 世男雄	31 9	34 5	85	愛宕山丸一等運転士	東京商船・航海科31年5/19卒
岡尾 定之助	34 5	34 5	80	阿蘇山丸一等運転士	
永津 知平	34 6		75	剣山丸一等運転士	東京商船・航海科32年4/21卒
鬼玉 梅太郎	30 11	33 12	115	予備一等機関士	東京商船・機関科27年10/9卒
黒澤 三千六	31 1	34 5	100	勝立丸一等機関士	東京商船・機関科29年4/23卒
弘中 嘉一	32 10	34 5	90	剣山丸一等機関士	
高田 万次郎	28 10	34 5	90	有明丸一等機関士	
井上 幸三郎	33 4	34 5	90	彦山丸一等機関士	
小澤 磯吉	32 9	34 5	75	下船一等機関士	
森川 代五郎	30 6	34 5	75	富士山丸一等機関士	
松村 作二郎	30 8	34 5	70	愛宕山丸一等機関士	
住原 宗吉	27 7	34 5	70	予備二等運転士	
原 庸吉	28 5	34 5	60	剣山丸二等運転士	
木下 市太郎	33 3	34 5	55	下船二等運転士	
益城 健	34 2	34 5	55	勝立丸二等運転士	函館分校・航海学部33年4/30卒
青木 延三	34 3	34 5	55	彦山丸二等運転士	
来村 琢磨	34 2	34 5	50	富士山丸二等運転士	
清水 竹次郎	29 3	34 5	50	富士山丸二等機関士	
河田 秀次郎	32 10	34 5	50	愛宕山丸二等機関士	
深山 頼一	32 10	34 5	45	有明丸二等機関士	
長野 又七郎	33 7	34 5	45	剣山丸二等運転士	
宮崎 宇吉	30 11	33 12	40	勝立丸二等機関士	
天野 榮太郎	29 8	34 5	45	彦山丸三等運転士	
福田 庸熊	31 4	34 5	40	富士山丸三等運転士	
太田 為雄	34 12		35	勝立丸三等運転士	東京商船・航海科34年12/3卒

(史料) 三井文庫所蔵「使用人録」(物産52-1)、商船学校1912、により作成。植崎猪太郎の出身校のみ米窪1939、による。

ていいように思われる。

ちなみに、表2の時点で船舶事務を管轄していた船舶課長には三井同族の三井守之助が就いていたが、同族なので彼には月給の支給はないので比較の対照にするのは難しいが、翌1903（明治36）年に船舶部が新設される際に船舶部長に就任する藤村義朗は、この02（明治35）年時点では口之津支店長で月給額は135円であり、浅井精一郎やハルストロームと比較するとはるかに月給額は低い。三井物産の高級船員はまずまずの好待遇を受けていたといえそうだが、浅井精一郎と同じ三菱商船学校に入学し、同校が1882（明治15）年に農商務省に移管されて商船学校と改称された直後に同校を卒業したとされる岩原謙三²⁶⁾は、商船学校卒業後いったん共同運輸会社に就職し、翌83（明治16）年に三井物産に船員としてではなく職員として転職しているが（由井 2008、88頁）、表2の時点（1902年）で岩原謙三はニューヨーク支店長に就いており、給与は月給額350円、外国在勤俸が年3900米ドル、妻帯手当が年900米ドルであり、浅井精一郎よりはるかに高給取りである。浅井精一郎は三井物産の船舶部門で順調に昇進を重ねたといえようが、岩原謙三のように事務職員として昇進を重ねる方がはるかに高い給与に到達できたことを示していよう。

V おわりに

ここまで人名や船名の列挙でやや冗長なものとなってしまった嫌いもあるが、物産「日記」を利用することで、これまで社史類が記していなかった三井物産創業期の船員——山本甚造、清水和助、水野角次郎、千葉登良三、杉本勘次郎、田坂初太郎、豊島鎌吉など——を把握することができた。そして彼らの多くが本免状より取得が容易な第三則（仮免状）の所持者であったことも確認できた。いまだ高級船員が多く供給されていなかった明治前期にあって、三井物産は外国人に依存しつつも、そのような仮免状取得者を精力的に

26) 岩原謙三は商船学校の卒業生として知られるが、彼の旧名である岩原澤之も含めてその卒業生名簿に彼の名は見られない。商船学校 1912、参照。

ルクルートしていた様子がうかがえよう。

ところで本稿で考察してきたのは、船長や機関長などの高級船員が中心である。船舶には水夫、火夫などの普通船員も乗船しているが、本稿ではそれらの船員についての考察はできなかつた。それはひとえに普通船員に関する史料に出会えなかつたからである。ただ海軍省艦政局が1888（明治21）年に「海員調査表」という史料を発行しており、それには87（明治20）年末時点の普通船員が列挙されている。そこに掲載されている三井物産の船舶の普通船員を表3として掲げておく。

表3 三井物産所有船舶の普通船員（明治20年12月現在）

船名	届け出地	船主	職分	姓名	住所	生年月
函館丸 (汽船)	東京府	三井物産会社	水夫	露野庄兵衛	和歌山県海部郡興津浦	弘化3年9月
				小谷徳太郎	広島県御調郡尾道新開	万延元年12月
				速川文五郎	北海道函館区木町	慶応元年8月
				高根文助	石川県珠洲郡野足瀬村	文久3年11月
				加藤金造	山口県差波郡浜方村	安政3年6月
				江川繁蔵	長崎県高来郡堂島村	慶応元年12月
				西土平之丞	広島県豊田郡内浦	安政元年2月
				宮原音吉	石川県羽咋郡北川尻村	安政5年2月
			火夫	若林甚五衛門	神奈川県鎌倉郡大船村	嘉永元年11月
				中村吉三郎	東京府荏原郡大井村	文久元年4月
				田邊治太郎	鹿児島県肝付郡新町	明治元年4月
				村田竹三郎	静岡県駿東郡西間内村	万延元年4月
			木工	比良松庄右衛門	福岡県宇良郡西新町	安政3年8月
				北岡佐之助	高知県長岡郡種崎村	弘化4年2月
包丁	柳 正三	東京府小石川区大門町	弘化3年5月			
	永川久太郎	新潟県三島郡出雲崎	文久元年7月			
	中尾佐蔵	東京府荏原郡大井村	天保7年7月			
通済丸 (汽船)	東京府	三井物産会社々主 三井武之助	水夫	伊吹元次郎	福井県足羽郡稲津村96	安政5年3月
				青木文七	東京府荏原郡北品川荏川町	安政5年5月
				丸山雅之助	広島県広島郡南町上一里町	安政6年2月
				相澤吉松	青森県下北郡城ヶ澤村	嘉永5年2月
				豊田音次郎	愛媛県越智郡下弓削村1672	文久3年6月
				木口佐太郎	東京府荏原郡品川歩行新宿	天保10年6月

				藤川佐平 ^(注1)	岩手県東閉伊郡浦鋤ヶ崎村	経営6年8月	
				中野文太郎	愛媛県那珂郡本島笠島浦	元治元年4月	
				亀田平治	千葉県中狭郡上小原村	嘉永6年11月	
			火夫	豊田市松	愛媛県越智郡下弓削村1782	文久2年11月	
				石渡大助	東京府荏原郡南品川	天保14年10月	
				池田兼太郎	高知県土佐郡中新町	安政6年4月	
			包丁	女池文造	新潟県新潟区東堀	安政6年4月	
				堀内仁作	新潟県新潟区学校前	文久3年11月	
				木下久八	新潟県蒲原郡新潟東堀	明治元年7月	
				本田武之助	青森県西津軽郡深浦村浜町	明治3年9月	
				角田駒吉	神奈川県横浜区山元町	文久元年12月	
				高杉兵吉	福井県足羽郡稲津村20	文久3年9月	
				吉村市松	東京府荏原郡南品川	天保9年12月	
				浅羽福松	東京府南葛飾郡久右衛門新田	文久元年正月	
				木村勇太郎	静岡県駿東郡西間川村	安政3年5月	
第十八 運礦丸	長崎県	三井養之助	水夫	藤田重造	山口県吉敷郡秋穂村	安政4年10月	
				古賀利吉	佐賀県佐賀郡新郷村	文久元年12月	
				山下政重	長崎県西彼郡茂木村	慶応元年10月	
				中村豊次	長崎県南高来郡有馬村	文久元年4月	
				岩内初平	福岡県三池大牟田村	明治4年8月	
秀吉丸 (汽船)	長崎県	三井養之助	水夫	山田友太郎	愛媛県和合郡奥居村 ^(注2)	明治2年10月	
				小亀己之助	岡山県小島郡田井村	安政5年3月	
				土井幸照	東京府芝区高輪	永政3年10月 ^(注3)	
				前田金太郎	鹿児島県	文久元年3月	
				西田國松	山口県熊毛郡上ノ関天神町	文久2年12月	
				布施松十郎	長崎県南高来郡津ノ口村 ^(注4)	文久2年10月	
				小山政次郎	長崎県南高来郡津ノ口村	文久3年7月	
				布施彌吉	長崎県南高来郡津ノ口村	文久元年3月	
				永野平十	長崎県南高来郡津ノ口村	文久2年11月	
				石丸末吉	愛媛県和合郡奥居村	安政6年10月	
				安村辰次	熊本県熊本区仲間町	安政2年5月	
				火夫	林 助三郎	山口県大津郡瀬戸崎村	安政4年7月
					寺田重太郎	長崎県南高来郡山田村	安政4年11月
					守谷策次	東京府赤坂区青山南町	元治元年5月
					石丸徳太郎	広島県広島区観音寺村	慶応2年8月
佐野治平	長崎県南松浦郡深江村	文久3年1月					
	釜野竹三	長崎県南松浦郡深江村	安政4年10月				
	古賀野末吉	長崎県南松浦郡深江村	慶応3年3月				

				藤田重太郎	長崎県南高来郡堂崎町	安政6年1月
			木工	福田角男	長崎県南高来郡口ノ津村	安政4年6月
筑後丸	長崎県	三井養之助	水夫	北村米藏	長崎県南高来郡口ノ津村	文久3年3月
				増井重正	静岡県榛原郡細江村	文久3年7月
				松本甚吉	長崎県西彼杵郡浦上淵村	明治2年9月
				松田金吾	長崎県南高来郡口ノ津村	明治元年4月
				樋口芳五郎	福岡県三潁郡上町	慶応3年1月
				田中長次	長崎県南松浦郡富江村	慶応元年2月
				阪井重藏	福岡県三池郡大牟田村	明治元年11月
				田尻久太郎	鹿児島県指宿郡十二町村	明治6年7月
			火夫	古賀野喜興次	長崎県南松浦郡富江村	安政5年5月
				酒匂宗右衛門	鹿児島県清水馬場	安政元年10月
中村岩太郎	長崎県西彼杵郡小瀬戸村	明治元年6月				
			寺岡大四郎	長崎県西彼杵郡日見村	元治元年2月	
三池丸	長崎県	三井養之助	水夫	片田銀一郎	長崎県南高来郡島原町	慶応元年4月
				天野静夫	長崎県南高来郡島原町	明治4年2月
				門 淺次郎	福岡県三池郡大牟田村	慶応2年4月
				脇田榮吉	鹿児島県鹿児島郡平良町	文久2年6月
				久保喜太郎	長崎県南高来郡口ノ津村	明治7年6月
				原野辰五郎	長崎県西彼杵郡浦上淵村	安政4年6月
			火夫	大場兼藏	長崎県南高来郡島原町	文久2年6月
				天野虎記	長崎県南高来郡島原町	慶応2年7月
				川井二郎	長崎県南高来郡島原町	安政元年5月
頼朝丸 (汽船)	長崎県	三井養之助	水夫	大崎作松	長崎県南高来郡口ノ津村	安政3年3月
				松尾安吉	長崎県南高来郡口ノ津村	嘉永6年4月
				高榮次郎平	長崎県南高来郡口ノ津村	嘉永元年6月
				池田勝十郎	大分県宇佐郡宇佐村	安政5年3月
				長南繁次郎	神奈川県横浜区松蔭町	嘉永4年4月
				松尾庄作	長崎県南高来郡口ノ津村	文久3年5月
				柴田安太郎	長崎県南高来郡加津佐村	文久元年5月
				吉川幸平	長崎県南高来郡南有馬村	嘉永5年12月
				太田末壽	長崎県南高来郡南有馬村	安政2年2月
				新建興吉	熊本県葦北郡岩木村	文久3年6月
				春田市次郎	鹿児島県高城郡大通町	万延元年9月
				太田音吉	長崎県南高来郡南有馬村	慶応元年8月
				大野作一	長崎県南高来郡口ノ津村	安政4年4月
				火夫	古賀野千代吉	長崎県南高来郡富江村
			平安安之助		長崎県西彼杵郡浦上淵村	文久3年11月

				本田亀之助 嶋田吉松 宮崎善藏 大久保兵藏 長島芳兵衛 江島芳松 柴田伊平 入口政太郎 永田常一 木下佐太郎	長崎県長崎区銅坐町 長崎県南高来郡口ノ津村 福岡県三潁郡小保町 長崎県南高来郡口ノ津村 福岡県宗像郡高野港町 長崎県南高来郡南申山村 長崎県南高来郡富口村 熊本県葦北郡汁石村 長崎県南高来郡口ノ津村 鹿児島県日置郡一木島田村	安政元年2月 嘉永6年9月 嘉永6年1月 元治元年6月 安政元年11月 慶応元年10月 慶応元年6月 元治元年2月 元治元年9月 安政2年3月
			木工	田口幸太郎	長崎県南高来郡口ノ津村	安政2年3月
第一 三光丸	福岡県	三井物産会社	水夫	山下倉太郎 古川六太郎 松本新治 小賀廣吉	長崎県南高来郡口ノ津村 長崎県西彼杵郡浦上淵村 山口県大島郡伊保田村 福岡県三池郡下里村	安政5年6月 安政3年1月 文久3年10月 明治2年12月
第二 三光丸	福岡県	三井物産会社	水夫	宮内駄次郎 武田幸吉 小山徳次郎 児玉源次郎	鹿児島県川辺郡秋日村 福井県三方郡久串村 長崎県南高来郡口ノ津村 長崎県南高来郡口ノ津村	文久2年2月 文久2年9月 慶応元年2月 慶応3年1月
第三 三光丸	福岡県	三井物産会社	水夫	堀川政八 中本又吉 中村亀吉 松本助太郎	長崎県西彼杵郡為石村 長崎県南松浦郡福江村 長崎県北松浦郡國下村 長崎県西彼杵郡雪ノ淵村	嘉永2年8月 安政5年8月 安政5年10月 慶応元年3月
第四 三光丸	福岡県	三井物産会社	水夫	丸屋常吉 吉田勇次郎 加知彌吉 篠崎兼四郎	大分県中津郡船場町 山口県都濃郡東豊木村 福岡県上毛郡小税村 長崎県壱岐郡諸吉村	嘉永2年5月 慶応元年8月 文久元年10月 慶応元年1月
第五 三光丸	福岡県	三井物産会社	水夫	小池荒次郎 廣友村吉 濱崎儀八 濱崎鶴助	愛媛県和气郡興居島村 山口県熊毛郡葦崎村 鹿児島県榑宿郡十二町村 鹿児島県榑宿郡十二町村	嘉永5年5月 慶応元年12月 嘉永3年11月 明治3年8月

(史料) 海軍省艦政局1888、により作成。

(注1) 「嘗テ海軍ノ兵役ニ服セル者」という注記がある。

(注2) 「興居村」は「奥居村」の誤記か。

(注3) 「永政」は「安政」の間違いであろう。

(注4) 「津ノ口村」とあるのは「口ノ津村」の誤記か。

(筆者は関西学院大学商学部教授)

〈付記〉

成稿に際して史料閲覧・引用をお許し下さった公益財団法人三井文庫に対し末筆ながら御礼申し上げたい。

【参考文献】（※は国会図書館デジタルコレクションで閲覧可能なもの）

(1) 書籍・雑誌・新聞

伊藤之雄（2015）『伊藤博文－近代日本を創った男－』講談社。

エス・ケイ・ケイ編（1991）『国際人事典』毎日コミュニケーションズ。

大阪商船三井船舶株式会社編（1969）『三井船舶株式会社社史』同社。

太田仙一（2015）「郵便汽船三菱会社の高級船員と三菱商船学校」『三菱史料館論集』第16号。

粕谷誠（2002）『豪商の明治』名古屋大学出版会。

木山実（2009）『近代日本と三井物産』ミネルヴァ書房。

日本経営史研究所編（1985a）『創業百年史』大阪商船三井船舶株式会社。

日本経営史研究所編（1985b）『創業百年史資料』大阪商船三井船舶株式会社。

日本ペイント編（1982）『日本ペイント百年史』同社。

三井船舶株式会社編（1958）『創業八十年史』同社。

三井文庫編（1980）『三井事業史』本篇第2巻、三井文庫。

朝野新聞（1879）河岡彦三に関する記事（12月2日）。

東京商船大学百年史編集委員会編（1976）『東京商船大学百年史』同大学。

由井常彦（2008）「明治期三井物産の経営者（中）－飯田義一、小室三吉、岩原謙三について－」『三井文庫論叢』第42号。

弓削町役場編（1986）『弓削町誌』同役場。

読売新聞（1894）「商船有明丸香港より無事に帰朝す」（明治27年9月22日朝刊）。

※米窪満亮（1939）『海の聖者榑崎猪太郎伝』日本海員組合。

(2) 史料

〈史料紹介〉（2007）「三井物産会社「日記」第1号」『三井文庫論叢』第41号。

〈史料紹介〉（2008）「三井物産会社「日記」第2号」『三井文庫論叢』第42号。

三井物産「議事録」明治27年3月～12月（三井文庫所蔵史料）請求記号：物産102。

※海軍省艦政局（1888）「海員調査表」（明治21年9月発行）。

※松井忠兵衛編（1882）「海員録」（明治15年5月5日出版）。

※山田保編（1881）「海員録」（明治14年3月15日出版）。

※横井時庸編（1897）「帝国海員録」（明治30年6月）。

※商船学校（1912）「商船学校一覧」（明治45年3月）。

※商船学校（1924）「商船学校一覧」（大正13年10月）。